

コミュニケーションを図る上での必要要因 —リコールでの担当患者を振り返って—

○森松重也子、松田久美子、岩男 好恵
柏木伸一郎
小児歯科 柏木医院

当院では口腔内状況の問題だけでなく、患児や母親の性格および患児を取り巻く環境などに問題がある場合、担当制を導入している。近年はう蝕の問題より、母親や患児の性格を理由とした担当患児が増えている。これらのケースの一番の問題は、コミュニケーションが取りにくい点である。そこで、母親の性格や育児姿勢および生活環境等を知ること、リコールでの円滑な対応が可能と考え、今回調査を行った結果若干の知見を得たので報告する。

対 象：

1996年1月から1999年12月までの4年間に、担当制とした新患は326名であった。今回その中から、母親や子供に問題がありかつ初回来院時年齢が4歳以下の患児178名を対象とした。

調査方法：

問診と健診用カルテに記載している項目の内、母親と患児の性格および育児姿勢等について分析した。また、この他にそれぞれの担当者が母親や患児に指導していく中で、気が付いた事なども参考とした。

結 果：

- 1) 母親の性格は、心配性が最も多く、続いて気が弱い、ルーズの順であった。
- 2) 担当の患児は、65%が第一子だった。また、ほとんどの子が核家族だった。
- 3) 子供の性格は、恐がり・泣き虫・甘えっ子等であった。

ま と め：

近年、核家族が増え、母親は育児に対する悩みや不安を相談できる人は少なくなっていると思われる。また、母親の性格を見ると心配性や気が弱い等があったが、これも育児に対する不安の表れと思われる。今後リコールを継続する上で、歯科だけの問題にこだわらず、母親のよき相談相手として、コミュニケーションを図っていきたいと考えている。

思春期顎関節症患者の治療システムを考察するための治験例

○石谷徳人、重田浩樹、長谷川大子、
*奥 猛志、小椋 正
鹿大・歯・小児歯 *おく小児矯正歯科

当科では開設以来、思春期の顎関節症症状を主訴として来院する患者を対象として治療を行ってきた。

近年、顎関節症はself-limitingな疾患と考えられるようになり、治療法は可逆的かつ保存的なものであるべきとされ、不可逆的なものの選択には慎重であらねばならないという考えが主流である。しかし、可逆的な治療法のみでは症状の改善が得られないケースもあり、これらは不可逆的な治療の対象となり得ると考える。当科においても、スプリント療法、理学療法を中心とした保存的な治療法を初期治療の第一選択としているが、これらの治療法においても症状が改善しない場合は、治療の再評価を実施し、診査を十分に行った上で、症状の消失する顎位を検討し、症状消失が確認された場合、不可逆的な治療である咬合治療を行っている。しかし、治療法としては可逆的かつ保存的なものであるべきことから、以前のものを改定されて顎関節症治療の治療指針として活用されている。

今回、鹿児島大学歯学部小児歯科外来を訪れ、顎関節症と診断し治療を行った患者のうち、代表的治療例を報告するとこととし、これらの症例を通して我々の現在の思春期顎関節症治療の考え方、当講座の臨床の流れを提示したい。